

# 二〇一九年度 入学試験問題 帰国生

## 国語

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから六ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに入記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんには二行以上解答してはいけません。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(1) 読書をする事、あるいは学問をすることの意味とは何なのだろうか。一般には、これまで知らなかった知識を得ることという答えが返ってきてきうだが、読書の「意味」、学問の「意味」というものを考えたとき、その答えだけでは十分ではないだろうと私は考えている。

読書によって、**A** 学ぶということによって、確かに新しい知識が自分のものとなる。しかし読書や学問をすることの「意味」は、端的に言って、自分がそれまで何も知らない存在であったことを初めて知る、そこに「意味」があるのだと思う。ある知識を得ることは、そんな知識も持っていなかった「私」を新たに発見することなのだ。

私一人の身体のなかに地球15周分の細胞が詰まっていると知るとは、そんなにすごい存在だったのかと感動することは、そんなことも知らない自分であったということ、改めて知ることからくる感動なのだ。初めから何でも知っていたら、感動などは生まれない。「知らない存在としての自分を知る」こと、学問はそこから出発する。

自分の知っていることは世界のほんの一部にしか過ぎないのだと自覚する、それはすなわち、自分という存在の相対化ということである。それを自覚しないあいだは、自分が絶対だと思いがちである。自分だけしか見えていない。世界は自分のために回っているような錯覚を持つ。

自分は「まだ」何も知らない存在なのだと知ることによって、相手と自分との関係も見えてくるだろうし、世界のなかでの自分が存在することの意味も考えることになるだろう。私は「まだ」何も知らないと自覚することは、いまから世界を見ることができるといふことでもある。それが学問のモチベーションになり、**★** 駆動力になる。

★ わが家に小さな子どもがやってきた。まだ一歳にもならない女の子である。世の中では「マゴ」と呼ぶらしいが、それが可愛いのである。

見ているといくつも発見がある。自分の子のときには見えていなかったことばかりである。彼女は世界の中心にいる。天動説のようなもので、自分では何もなくても、すべてが彼女のまわりをまわっている。世界を所  
有し、世界は包んでくれても、**★** 対峙することはない。

(1) ホイク園や幼稚園に行くようになって、**(3)** 同じような年齢層の「他者」に初めて出会うことになる。ここで「他者」を知ることが、すなわち自分と

いう存在を意識する最初の経験となるのだろう。世界は自分のためだけにまわっているのではないことを初めて知る。「他者」を知ることによって初めて「自己」というものへの意識が芽生える。「自我のめばえ」は、「他者」によって意識される「自己」への視線である。自分を外から見るといふ経験、これはすなわち学ぶということの最初の経験なのである。

先に述べたように、読書をするということは、「こんなことも知らなかった自分」を発見すること、**B** 自分を客観的に眺めることである。「自己」の相対化であると言ってもいい。

こんなことを考えている人がいたのかと思う。こんなひたすらな愛があったのか、こんな辛い別れがあるのかと、小説に涙ぐむ。それらは「読む」という行為の以前には、知らなかった世界ばかりである。それを知るといふことは、すなわち「それを知らなかった自分」を知るといふことである。一冊の書物を読めば、その分、自分を見る新しい視線が自分のなかに生まれる。「自己」の相対化とはそういうことである。

勉強をするのは、そのためである。読書にしても、勉強にしても、それは知識を広げるといふことも確かにその通りだが、もっと大切なことは、自分を客観的に眺めるための、新しい場所を獲得するという意味のほうが大い。小さな子が他者と出会って初めて自分に気づいたように、私たちは「自己」をいろいろな角度から見するための、複数の視線を得るために、勉強をし、読書をする。それを欠くと、ひとりよがりの自分を抜け出すことができない。「他者」との関係性を築くことができない。

勉強や読書は、自分では持ち得ない「他の時間」を持つということでもある。過去の多くの時間に出会うということでもある。過去の時間を所有する、それもまた、自分だけでは持ちえなかった自分への視線を得ることでもあるだろう。そんな風にして、それぞれの個人は世界と向き合うための基盤を作っていく。

(4) 「こんなことも知らなかった自分」を知るといふことは、「知への respect (尊敬・敬意)」という点からもとても重要である。一つの科学的事実が明らかになるまでに、どれだけの時間がかかり、どれだけの人々のためまぬ努力が要求されたのか。今という時代にあつては、当たり前とも思えるような事実が、正しいものとして定着するためには、どれほどの時間がかかり、どのような実験や理論構築を経てなされたものなのか、それらをつぶさに知ることによってのみ、私たちは、**(3)** ツウジョウいともたやすく口に

してしまいやすい（真理）というものに対する敬意を持つことが可能になる。

その一例を、「生命の自然発生説」の否定の歴史をたどることで見てみたい。「生命は自然に発生するものではない」という命題を<sup>★</sup>シヨウメイするために、どのような試行錯誤がなされたか。私たち現代人は誰もが、「生命」というものは自然に発生したのではなく、生命は生命からしか生まれてこないものだとは知っている。<sup>□</sup>C、現代では常識以前とも思えるこの概念が定着するまでには、長い時間と、多くの議論、多くの実験がなされて初めて確立したものである。

一般に、生命が<sup>○</sup>ムキブツから自然に発生すると初めて唱えたのは、ギリシアの哲学者、アリストテレスだと言われている。アリストテレスには『動物誌』『動物発生論』という動物の生殖、発生などについてのそれまでの知見の整理、自身の観察に基づく大著がある。『動物誌』のほうはどこまでが自身の著であるかについての疑問があるようだが、『動物発生論』は全5巻、60章からなる大著である。そのなかで親から直接生まれないで、自然に生まれるものもあるとし、<sup>□</sup>D ミツバチやホタルは草の露から、ウナギや、エビ、タコなどは海底の泥から直接生まれるとした。水中での観察手段を持たない当時、海底の泥から考えるのはなるほどと思うし、ホタルが草の露からと考えるのも頷ける。

この考え方は、1861年、19世紀になってルイ・パスツールによってようやくそれが完全に否定されるまで、実に2000年近く、信じられてきたことになる。それだけアリストテレスの威光が強かったということでもあるだろうが、いずれにしても、<sup>○</sup>(5) いったん定説として流布してしまった考え方に疑いをさしはさむということがいかに難しいかを物語る事実である。

（永田和宏『知の体力』）

★モチベーション……やる気。

★駆動力……動かす力。

★対峙する……違う立場で向き合うこと。

★命題……真偽を判定することのできる文。

## 問一

——(1)「読書をする事、あるいは学問をすることの意味」とありますが、筆者が考える最も重要な意味を説明したものとしてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア それまで知らなかった知識を得ること。

イ 自分が何も知らないことを知ること。

ウ 知っている知識を改めて知り感動すること。

エ 知識を増やし将来に生かすこと。

## 問二

——(2)「自分という存在の相対化」とありますが、これにより人は何を考えるようになりますか。解答らんに二行以内で答えなさい。

## 問三

——(3)「同じような年齢層の（他者）」に初めて出会うことになる。」とありますが、子どもと（他者）との出会いは、私たちが勉強をし読書をする事とどのような点で共通していますか。解答らんに二行以内で答えなさい。

## 問四

——(4)「『こんなことも知らなかった自分』を知るといことは、『知への respect（尊敬・敬意）』という点からもとても重要である。」とありますが、なぜですか。次のア～エの中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一つの科学的事実が明らかになるまでの時間を知ることが、人類の歴史的進歩の偉大さを感じることに繋がるから。

イ 一つの科学的事実が明らかになるまでの努力を知ることが、科学者への尊敬に繋がるから。

ウ 一つの科学的事実の成り立ちを知ることが、〈真理〉への敬意に繋がるから。

エ 一つの科学的事実が明らかになるまでの理論構築を知ることが、自分の無力さへの気付きになるから。

## 問五

——(5)「いったん定説として流布してしまった考え方に疑いをさしはさむということがいかに難しいかを物語る事実」とはどのような事実ですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問六

A                      D

に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- ア    しかし                      イ    すなわち  
ウ    たとえば                      エ    あるいは

問七

——(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア    学問をすることの意味は、それまで知らなかった知識を得ることに尽きる。  
イ    学問をすることの意味は、世界の全てを知り尽くした絶対的状态の自分を見出すことである。  
ウ    学問をすることの意味は、自分がそれまで何も知らない存在であったことを知ることである。  
エ    学問をすることの意味は、唯一無二の自分という主観的(自己)に気がつくことである。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「空高町立山村留学センター」は四国の山のなかにあり、四年生の「ぼく」を含め、日本各地から集まった十三人の小学生が寮生活をしている。センターの子どもたちは地元集落の人々から家族のようにかわいがられ、秋祭りでは、「しゃぎり」と呼ばれるおみこしの先導役や「お旅練り」という伝統芸能などを任されている。「お旅練り」は、畑をあらすキツネとサルを獵師が退治するという話を踊りによって演じるものである。この祭りの日は、子どもたちの家族も見物に町を訪れる。

「しゃぎり」の行列が沙也のあとに続いた。開くんも涼しい顔で歩いていた。はかま姿がバッチリ決まって、なんだか大人みたいだ。

「立派なもんや」  
見物人の間から拍手がわいた。

「ありがたい、ありがたい」

村上のばあちゃん、顔の前でさかんに手をこすり合わせていた。

沙也を先頭に、神社の急勾配の石段を長い行列がゆつくりと下りていく。行列の中ほどにキツネのお面をかぶったたくとがいた。うれしそうに白い棒をふりまわしている。

——よし、行くぞ。

ぼくはサルのお面をかぶり直して気合を入れた。

行列は集落中を練り歩いた。行く先々の家の前で人が待っていた。見物人も A あとに続く。毎日遊びまわっているところが、こうして見ると初めて来たところみたいで新鮮だった。ゆつくりとした動きなのに、体中汗ばんでいた。

一時間近く歩いて、ようやく終点の広場に到着した。人ばかりはますます大きくなっていった。ぼくは B 母さんたちの姿を探した。お面越しから視界がせまくて見えにくい。

——えー、来てないの？

ぼくの体から風船がしぼむみたいに空気がぬけていった。

松つあんのお獅子舞が終わり、いよいよ「お旅練り」が始まった。

みきをおぶったゆりのユーモラスな動きに、会場から笑いがおこった。サルとキツネのお面をかぶったたくとが元氣いっぱい暴れまわると、

20

15

10

5

やんやの喝采だった。

「悪さするなよー」という野次まで飛んだ。獵師役の雄大が登場して、ぼくの作った鉄砲が秋の陽を反射して光った。

「いよつ、雄大！ 日本一！」

元さんの★だみ声がひととき大きく響いた。

獵師の一瞬のすきを見てキツネは山へ逃げ出し、逃げ遅れたサルは鉄砲を構えた獵師にムシロの隅まで追い詰められた。そして獵師に向かって必死に命乞いの踊りをする。★四つんばいで進んでひざ立ちになり、上向きにそろえた両手をくるりと回して拜む。進んでは拜み、進んでは拜み、ひざが痛いのも忘れてぼくは何度も何度も繰り返した。お願い、撃たないで。会場はしーんと静まりかえった。哀切なサルの祈りに、観客はどうなることかと息をのんで成り行きを見守った。

何分間そうしていただろう？ とつぜん、ぼくの胸にサルの悲しみが降ってきた。

——死にたくない、死にたくない、もっと生きたい！

サルの叫びが聞こえた気がした。ぼくはもう少しで泣きそうになった。のどをつまらせながら、命乞いの踊りを続けた。時間がとまったかのようだった。その瞬間、

ドーン！

大太鼓が打ち鳴らされ、鉄砲が火を噴いた。

そんなわけのないのに、(1) ぼくの目には確かに銃口からふき出す赤い火が見えた。

ぼくは C ムシロの上を転がった。そして全身の力をこめて立ち上がり、もう一度拜む。そのとたん、

ドーン！

ふたたび鉄砲が火を噴いた。

そうして、「お旅練り」は終わった。  
「ほう」というため息とともに、会場から大きな拍手がわいた。ぼくの胸は達成感でいっぱいだった。大きな虹マスを釣り上げたときと同じ、びつしりとどこにも隙間のない満足感がぼくの胸を埋めていた。

ムシロからおりたぼくのそばに、一人のおじいさんが近寄ってきた。

「ありがと、ありがと。わしは今まで畑をあらすサルが憎うてならんかつたんじゃが、あんたを見とつたら、えさがのうなって山を下りざるをえな

20

15

10

5

35

30

25

くなつたサルにはサルの悲しみがあるゆうことが、ようわかつた。今日はあんたから大切なことを教えてもらうた」

「ほんとうにありがとな」とがっしりした手で握手され、ぼくも反射的に「ありがとございます」と頭を下げていた。

——よかつた。

無事大役をやり終えてよかつたのか、おじいさんが喜んでくれてよかつたのかどっちかはわからなかつたけれど、とにかく「よかつた」と心の底から思った。

お面を取って、ぼくはようやく大きく息をついだ。ずっと息苦しいのを我慢してたんだ。山から吹いた一陣の風が、ぐっしよりぬれたぼくの顔の汗をかわかしてくれた。

「壮太」

背後から声をかけられて振り返ると、母さんがいた。

「あれ？ 来てたの」

「うん」

「なんだか浮かない表情だ。」

「父さんとまりっぺは？」

「ゆうべ夜中にまりが熱を出したのよ。夜勤明けの父さんと交代して母さん一人で来た」

「ふうん……。見てくれた？」

「……見た。最後のほうだけ」

歯になにかはさまつたような、はっきりしない言い方が気になった。なにが言いたいんだ？

「どうして、サルなの？」

「は？」

「だって、みじめな役じゃない」

——みじめ？ どういうこと？

「さんざん命乞いして、そのあげく殺されちゃうなんて、母さん、見て、いたたまれなかつた」

あー、そうか、と思った。母さん、がっかりしたんだ。サル役のぼくに、がっかりしたんだ。さっきまでふくらんでいた気持ちが急速にしぼんでいくのがわかつた。母さんはいつだってそうだ。ぼくが華々しく活躍することだけを期待する。縁の下の力持ちなんていやなんだ。

85

80

75

70

65

60

「沙也、こっち向いて。そうそう。みんなに見せるんだからいい写真撮らなきゃ」

すぐ横で沙也のママのはしゃいだ声がした。

「こう？」

両手ピースでポーズを決める沙也は、満面の笑みだ。(3) 母さんがわずかにほおをゆがめた。

「帰れよ」

気がついたら言っていた。飛び出た言葉に自分でびっくりして、「なに言っただ、おれ？」って思ったけど、もう遅い。

「どういうこと？」

D 母さんは、ぼくの顔を見つめた。その鈍感さにいらついた。

「帰れ！」

今度ははっきりと言いつつ放った。

帰れ、帰れ。母さんはなんにもわかつてない。(4) サルの悲しみも、ぼくの達成感も、なにもかも！ わきあがった怒りを持って余したぼくは、駆け出していた。早く一人になりたかつた。祭りの人ごみを縫ってお寺の坂道を駆け上つた。

境内ではサクラがしつぽをばたばた振って、ぼくを待っていた。

「サクラあー」

ぼくはサクラの首つ玉にかじりついた。サクラはサルのお面にぎよつとした様子で、くんくん匂いをかいだあと、ペろりとぼくのおでこの汗をなめた。境内からは集落が見わたせた。祭りでにぎわう広場は、どこからわいてきたんだらうと思うほどの人であふれている。ざわめきが山の斜面を伝って上つてくる。いつもは静かすぎるほど静かな集落が活気にあふれていた。

——ふう。

一息で上つてきたせいで息がきれた。ぼくは大きく息を吸った。

「母さんって、なんにもわかつてないよな」

思わず (5) をこぼすと、「そうだよ」と言うようにサクラがまたペろりとぼくをなめた。そのとき祭りの会場がどよめいて人ごみが乱れた。

——あ、モチまきが始まつた！

あわててぼくはサクラに「さよなら」を言い、山を駆け下りた。モチまきではお菓子が入った小袋もまかれる。拾いそこねたら大変だ。

(八束澄子「ぼくらの山の学校」)

120

115

110

105

100

95

90

★だみ声……………にごった感じの声。

★四つんばい……………両手両足を地面につけてはうこと。

★一陣の風……………しきりに吹く風。

問一 — (1)「ぼくの目には確かに銃口からふき出す赤い火が見えた。」とあります。なぜですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問二 — (2)「虹マス」とありますが、「魚の名前」を使った次の一〜五の成句の意味を、後の「意味」ア〜オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 えびでたいをつる

二 とどのつまり

三 さばを読む

四 ねこにかつおぶし

五 まないたのこい

〔意味〕

ア ほかの人の思うとおりになるしかないこと

イ 好きなものをそばに置くと、安心していられないこと

ウ 小さなもつで大きな利益をえること

エ 数をごまかすこと

オ 結局は、ということ

問三 — (3)「母さんがわずかにほおをゆがめた。」とありますが、なぜですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問四 — (4)「サルの悲しみ」とありますが、「ぼく」が演じた「サル」の悲しみとはどのような悲しみですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五 (5) に入れるのにふさわしいことばをひらがな二字で答えなさい。

問六

A ~ D に当てはまる語を次のア〜エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ころころと

イ きよとんと

ウ きよろきよろと

エ ぞろぞろと

問七

次の二文を文章の適切な部分に戻し、直前の五字を答えなさい。(句読点やかっこがあれば字数に入ります。)

そうか。それで遅くなったのか。

問八

本文の内容に合うものを次のア〜エの中から一つを選び、記号で答えなさい。

ア 「お旅練り」では、サル役のとくと「ぼく」が暴れて畑を荒らし、

猟師に追い詰められる。逃げおくれた「ぼく」は必死になって命乞いの踊りをするが、結局、殺される。「ぼく」は、サルの心を理解して踊り続け、終わった後、達成感を感じた。

イ 「しゃぎり」の行列では、先頭の沙也やキツネのお面をかぶった

開、サルのお面をかぶった「ぼく」たちが見物人たちの拍手を受ける。「ぼく」は、家族の姿が見えないことに落胆するが、「お旅練り」では悲しみを抱いたサルをけんめいに演じた。

ウ 「しゃぎり」の後に行われた「お旅練り」で、「ぼく」が演じたサル

は、畑を荒らし猟師に追い詰められ、けんめいに命乞いをするが、結局、殺される。「ぼく」は、サルの感情を理解して気持ちをこめて踊り、終わった後、大変満足できた。

エ 「ぼく」が「お旅練り」で演じたサルは、畑を荒らし猟師に殺されるが、サルにはやむをえない事情があり、「ぼく」の「死にたくない」というセリフによって観客にもサルのつらさが伝わり、終わった後、「ぼく」は観客のおじいさんから感謝された。

